

エッセイ

また アイ・ラブ・パリ
— 空からパリを見てみよう —

松村 茂治

第一話 エッフェル塔

— または、第三の矢「スイスイ入場券」 —

話は、四年前の、初めてのパリ旅行にさかのぼる。

パリに着いたその日、セーヌ河畔まで散歩の足を伸ばしたとき、すぐ近くからセーヌ川観光船が出ていることを知って、早速乗船してみることにしたのである。棧橋付近は、たいそうな混みようだったが、チケットはすぐに買え、それほど待ち時間もなく船にも乗れたので、さすが世界的な観光地、人の流れをよく把握して手際よく営業していると、そのときは感心したのだが、い

ささか買ひ被りだったことが後になって分かってきた。

数日後、エッフェル塔の下まで行ってみて、改めて、世界の観光地の真の姿を垣間見た気がしたのである。塔の下を埋め尽くす人の列は、どこが最後尾なのか、すぐには判らない。しばらく様子を見ていたが、列はほとんど進んでいるようには見えなかった。おそらく、二―三時間並んだところで、入れるものではないだろう。夏とは言え、午後の遅い時間ということもあり、目を改めて出直すことにして、係のお姉さんに聞いてみると、朝は九時からの営業だという。早起きして開門前に並べば何とかなると思ったのだが、その後、訪れる機会のないまま、帰国してしまったのだった。

帰国後、パリ旅行を扱ったテレビ番組を見るにつけ、エッフェル塔には登らなかつたどころか、夜空に浮かぶきらびやかな塔の姿も見ずに帰って来たことをひどく悔やむ妻から、このままでは人様に胸を張って、パリに行ってきたとは言えないなどと、脅迫まがいの泣き言を聞かされ、戦略を立てる必要を感じたのである。それが、今回の旅で用意した三本目の矢、「エッフェル塔見学ツアー参加券」である。

エッフェル塔へのガイドツアーがあることは、インターネットやガイドブックを通じて薄々は知っていたが、当初は、利用しようとは思っていなかった。料金だつて馬鹿にならないし、そもそも言葉が不自由で、ガイドの説明など理解できないと思つたからだ。しかし、ネットを使って、いろいろと情報収集をしているときに、「エッフェル塔に優先入場！長蛇の列に並ぶことなく、スイスイ・・・」の文字を目にしたのである。前回の旅行でひどい混み様を見てきただけに、「・・・スイスイ・・・」には心が動いた。

探っていくと、エッフェル塔に関しては、展望台への入場と、パリ市内の観光やセーヌ川クルーズ、ランチや

ディナーなどを組み合わせたさまざまなツアーが用意されていることが分かってきた。もちろん、組み合わせの内容によつて、料金は異なってくる。どのような組み合わせが「お得」か、いろいろと比べてみたけれど、結局、塔に登ることが第一の、そして唯一の目的であることを思い出し、最もシンプルな、「塔見学ツアー」に決めたのだった。

シンプルとは言つても、それは廉価であることを意味するものではない。待ち時間さえ厭わなければ、通常料金は十五ユーロ程度のものだが、この「スイスイツアー」はガイド付きということもあつて、六十ユーロほどになる。フランス語であれ英語であれ、ガイドの説明など聞いたつて分かりはしなないと思うと、いまいましい値段ではあるが、あの行列を考えると、そうとばかりは言つてられない。

日本を発つ前、知人に、こんなツアーがあつて、少し高いとは思ふけれど・・・と話すと、その知人も、かつて列を作つたことがあり、その横を二十人ほどの団体が、通り抜けて行くのに遭遇したことがあるというので、「スイスイツアー」は、期待しても良さそうな気がして

きたのである。

私の申し込んだツアーは、午後二時に、現地オフィスを出発することになっている。できるだけ余計な動きはしないようにと、午前中は、エッフェル塔に近いマルモッタン美術館でモネの絵を見て、近くのカフェで昼食をとり（店の名前もよく見ずに入ったのだが、日本人夫妻のやっている店だったので、注文がしやすく、海外でのこういう店の存在は、本当に助かる）、地下鉄で二駅ほど戻って、塔を見上げる所に立ったのである。

ツアーオフィスは、地下鉄の出口からは、塔の下をぐるり抜けた反対側にあることになっている。高さ三百メートルの塔を支える脚部はずいぶんと大きく、その下を通り抜けることだけでも、貴重なエッフェル塔体験のだが、結構な時間がかかる。おまけに、通り抜けた先は、広い公園になっていて、周囲が大きな木で囲まれているために、事務所らしい建物は見えず、持っていた地図が頼りないこともあって、余裕を持って動いていたものの、最後には冷や汗をかいてのオフィス到着となってしまう。

ツアーでは、女性ガイドが、二十人弱のグループを案内、ペンキが何万リットル、（そして、私たちが日本人であることに気づいて）東京タワーは、実は、これを模して建てられました・・・などと説明をしてくれていたのだと思う。

展望台に登るためのエレベーターは、塔の脚部に設置されている。脚部は、人言えば、足を開いて踏ん張るようにして塔を支えているわけだから、そこに設置されたエレベーターは、垂直ではなく、脚部に沿って斜めに登って行くことになる。

ゲートの前は、相変わらず、人気テーマパークの入り口のような長蛇の列である。しかし我々は、強力な助手を得、本当に「スイスイ」という音が聞こえるくらい勢いで、長蛇を尻目にゲートを通り、エレベーター前に到着したのである。つまり、「第三の矢」は、本当に靈驗あらたかだったのである。

しかしながら、よく考えてみれば、ゲート近くにいた人たちは、半日以上も待って、「やれやれ、ようやく順番が回ってきた・・・」という人たちである。この期に及んで、鷹に油揚げをさらわれるような目に遭っているわけだから、こちらとしては、内心ではほくそ笑みながら

内してくれるというのだが、ガイドは英語で行うということ、改めて、米英の侵略を実感する。

一般論であるが、なぜ、ガイドは（と言っても、私が知っているのは、米・英・仏くらいのものだが）、我々、東洋人がいるのにも拘わらず、早口でまくし立てるような話し方を改めようとしなのだろうか。ガイドだけではない、街でちよつと何かを尋ねても、ネイティブの人に對するような応答が常である（私のしゃべり方がネイティブ並みと言うなら納得もするが、決してそういうレベルではない）。彼らは、早口でしゃべるといふことに、われわれ外国人には理解できないような、重要な価値を置いているのかもしれない。旅行用の英会話や仏語会話を集に、「モウスコシ ユックリ ハナシテ クダサイ」といった例文を見かけることがあるが、日本語会話集には絶対に不要の一言だと思ふ。

塔をほぼ真上に見上げるところまでやって来て、ガイド嬢は、この塔は、ギユスタブ・エッフェルによって、一八八九年のパリ万博の際に建てられたとか、建設当初は、パリの景観を害するとの理由で、識者たちによる撤去運動があったとか、高さが三百メートル、重さが何ト

も、どことなく深刻な表情を作ることになる。

同じ時間にオフィスを出発したグループはいくつかあったし、別のツアー会社もあるだろうから、こうした「スイスイツアー」は、一度にかなりの数が動いていることになる。ツアー会社とエッフェル塔との間で、どのような契約が交わされていて、それがどう周知され、一般客がそれをどう受け止めているのか、知るよしもないが、小心者の日本人観光客としては、ゲートに並ぶ人たちの横つ面を、ユーロ札ではたいして順番を得ているように、居心地の悪さは否めない。

「スイスイツアー」では、下から順に、第一展望台、第二展望台とエレベーターで上ってきて、その都度ガイドが説明してくれるのだが、案の定、ほとんど理解できない。仕方がないので、以前手にしたフランス語の参考書の中に、第二展望台まで自転車で登った男がいて、かかった時間は十数分だったとか、パラシュートをつけて展望台から飛び降りた青年がいたが、（パラシュートが開かず？）亡くなったとか、エッフェル塔は、何年かに一度塗り替えられるのでペンキ代が大変だなど、エッフェル塔にまつわるエピソードがあったのを思いだし、ガ

イド嬢はきつとそんなことをしゃべっているのだろうと自ら補うことで、説明を理解したことにしたのであった。

第一展望台から第二展望台に登るエレベーターの所で、一人、挙動不審な動きをする客のいたのが気になった。ガイドになにやら伝えて、グループを離れていったのである。英語の説明が分からないので別行動を取るということなら分からはないが、英語で要件を伝えていたようだから、言葉が不自由とは思えない。「実は、自分は高所恐怖症なので、第一展望台より上には行けそうにありません。ですから、ここから戻ります」など泣き言を言っていたのかもしれない。もともと、高所恐怖症の人がエッフェル塔に登ろうと考えることはないだろうから、ガイドブックにもあった、スイスイ入場のためだけにツアーを利用する事例だったのかもしれない。

最上階の第三展望台は、三百メートルの塔の、ほぼ頂上にある。そこには、設計者ギユスタブ・エッフェルの仕事部屋が復元され、エッフェル自身が人形となつて置かれていた。当初、ここでは気象観測が行われ、その後、ラジオやテレビ用の電波発信にも使われていたと聞く。周囲を見回しても、近くに、電波妨害になるような高層

建造物は見当たらないから、今でも現役で働いているのかもしれない。

登ってしまえば、そこからの見晴らしに心は奪われてしまうが、下から見上げたとき、そこはとんでもない高さだったはずだ。その高さを感じないのは、そこが結構広く、相変わらずの人混みだからだろう。高さがある分、風が強かったが、空は薄曇りで、遠くまで（フランスの地理がよく分からないので、東京タワーを例にすれば、丹沢から筑波山の辺りまで）見渡すことができた。さっきまであった一抹の後ろめたさは何処へやら、「スイスイ」を使ってここまで登ってきたのは大正解だったと思う。

この街にいれば、常に、エッフェル塔を気にしながら歩くことになる。塔を目印にして、歩く方向を決めることがあるし、見えなければ見えないなりに、そのことが、自分たちの現在地を知るための重要な手掛かりとなる。

このように、常に眺める対象であったエッフェル塔も、この日ばかりは、塔の一部になることによつて、私たちは眺められる対象になった訳であり、最上階をぐるりと回って、パリ全体を眺める対象としたのである。

下りは、第二展望台までエレベーターで降り、そこから先は歩いて降りることにした。歩くことに、まだそれほど困難を感じていなかったからということもあるが、私は、エッフェル塔の美しさは、その鉄骨の組み方にあると考えているので、できるだけ間近から、それを鑑賞してみたいと思つたのである。変哲のない鉄の構造物と言つてしまえばそれまでだが、内側からの眺めには、外から見上げていたのとは異なつた趣がある。塔を身近に感じるといつたら良いのか・・・少なくとも、パリの観光案内で目にするお馴染みのエッフェル塔を表の姿とすれば、階段から見るとは、まさに裏側の世界なのだが、どうして鋼鉄の構造物がこんなにも優美なのか、しばし見とれてしまうのである。

こうして、ようやく妻は自信を持つて、パリに行ってきたと口にするのが可能になつたのである。

第二話 ノートルダム大聖堂

ーまたは、土産物屋の不機嫌な売り子ー

ときどき開くフランス語の参考書に、フランスで観光

客が集まる場所ベストテンが紹介されている。二位がルーブル美術館、三位がヴェルサイユ宮殿、四位がエッフェル塔となつている。こう書くと、じゃあ、一位はノートルダム寺院？・・・と言われそうだが、そうではない。名の知れた所としては、印象派の展示で有名なオルセー美術館が六位、第三話で取り上げる凱旋門は九位とあり、ノートルダムはベストテンには入っていないのである。だったら、なぜここで観光地ベストテンなど話題にしたのかと言われるのかもしれないが、それには、ベストテンに入つていなかったから、と答えることになる。つまり、ベストテンに入っていないということは、私に、ノートルダムはそれほど観光客の集まる場所ではないという先入観を与えたのである。

そんなことよりも、一位はどこか、早く教えて欲しいと・・・その要求には、ここで話題として取り上げる必要のない所、敢えてフランスに造る必要のない施設と答えておこうか。つまり、その施設に行くためにわざわざフランスまで行く必要はないような所と言えば、答えたも同然であろう。

話を本題に戻そう。何が問題だったかというところ、ベス

トテン順位とは裏腹に、ノートルダムは大変な混みようだったのである。そのときには、まだ凱旋門には行っていないなかったので、第九位の混み具合は実感していなかったたのであるが、ノートルダムは、その何倍も混んでいたのである。

もちろん、ノートルダムが人の集まる場所であることを知らなかった訳ではない。四年前に行ったときにも、聖堂に入るにあたって、正面の広場に長蛇の列を作った覚えがある。列は、朝の開門（開扉？）の前にだけ出来るのではなく、昼近くなっても午後になってもできていたが、ずっと待たされたという記憶はない。列はどんな建物に吸収されて行ったように思う。

立地から言って、ノートルダム大聖堂は、パリ誕生の地にしてパリの中心部、シテ島にあり、どちらかというところ外れに位置する凱旋門より何倍も人の集まりやすい所にある訳だが、そこがなぜベストテンに入っていないのか、不思議と言えば不思議なのである。

帰ってから、改めて参考書を見て分かったことだが、ベストテンについては、「大聖堂・教会を除く」との但し書きがついていた。これを見落としていたのである。

大分寄り道が長くなってしまった。私たちは、塔への登頂を急ぎたかったのである。しかし、肝心の入り口が見つからないのだ。ガイドブックを見ると、入り口は、聖堂に向かって左側の手前、聖堂内を一回りしてきた私たちが立っているすぐ近くにあるはずなのだが、案内板一つ出ていないのである。

私たちが立っていたすぐ近くに土産物の売店があったので、客足の途切れた隙に、塔の入り口はどこにあるのか聞いてみたのである。すると、年配の売り子の女性は、「ああ、またその質問・・・一体全体、一日に何人相手をしなければならぬの！」と言わんばかりの顔つきで、手元にあった、商品を入れるための紙袋を私の前に差し出したのである。そこにはボールペンで、「塔への入り口は、聖堂の外」との走り書きがあった。私の質問を受けてから書いたものではない。重要な接客ツールとして、毎日使っているものに違いない。紙袋はかなりのしわくちゃ状態だったから。もちろん、私の注目は、しわくちゃな紙袋ではなく、無愛想でつつけんどんな売り子の表情に向いてしまう。ああ、この人に尋ねてはいけなかったのだ、と思ったのだが、とき既に遅しであった。

きつと、ベストテンは、チケットの販売枚数を元に算出しているのである。大聖堂・教会は、どこも原則的に入場無料である。心に留めておかなければならないことは、ベストテンに名前を連ねていないからといって、人が集まらないことを意味しているわけではないということである。

薄暗い聖堂内を一周して、入り口近くまで戻って来たところで、聖堂訪問の当初の目的である塔への登頂を試みようとしたのである。前回来たときには、塔の上に登れるということを知らず、聖堂だけを見て帰ってしまったので、今回は、何としても登りたいと思ったのである。「パリ・ミュージアム・パス」を用意したのも、ここへの入場を考えてのことであった。こう書くと、不思議に思う方がいるかもしれない。大聖堂・教会は無料のはずなのに、なぜパスが必要なのか。この点については、私見であるが、聖堂への入場と塔への入場は、同じ建物に対する行為ではあるが、別扱いと考えているのではないだろうか。要するに神様に接する場と周囲の景観を眺める場とは、全く別物ということである。

しかし、落ち着いて考えてみるに、聖堂の中をぐるっと回って来て、塔への入り口を探そうとすれば、とりあえず彼女に聞いてみるというのは、極めて自然なプロセスなのである。なぜなら、聖堂入場は無料なので、チケット販売所もなければモギリのお姉さんも、腕に腕章をつけた「案内係」のスタッフもないのである。近場の関係者と言えば、売店の売り子ということになるのだ。しかも、後で分かったことであるが、塔への入り口は、売店とは壁を一枚隔てた所にあるのである。

私は、こちらの都合を優先して彼女を選んだわけではなく、彼女の仕事の邪魔をしないように、タイミングを選んで声をかけたつもりである。それにも拘わらず、この邪険な仕打ちは何なのか。しかしながら、もう少し考えてみると、塔入り口の案内を彼女にさせておくのは適切なことではないということが分かってくる。私を邪険に扱った女の肩を持つつもりはないが、彼女の本業は売店の販売員であり、案内係ではないのだ。

そのことは理解した上で、敢えて言っておきたい。もし、塔への案内が本業ではないのなら、その思い

は、私たち観光客ではなく、この管理者に向けるべきではないか。そして、管理者には、観光客が塔への入り口を売り子に聞かなくても済むよう、分かり易い案内板を用意すればいいのである。観光立国でありながら、そうした、細かい所とか、観光客の立場になって考えるということが欠如しているように思えるのである。どうしても、見に来ていただくという姿勢ではなく、見せてやるといった態度が気になるのである。

売り子の仏頂面に押し出されるようにして外に出て、建物の角を回ったところで、塔入場がすっかり遠のいたことを知ったのであった。塔への入り口が見つからなかった訳ではない。お世辞にも立派とは言えない、つまり、裏口か関係者の通用門といった風情の鉄製の小さな門が、あることはあった。問題は、その門の大きさに対して、入場を待っている人の数がまさに桁外れだったのである。聖堂に沿う、幅五十六メートルの歩道には、人の歩く余地のないほどに、行列ができていて、その長さは聖堂の建物とほぼ同じ長さ、優に百メートルはあったろう。

何はともあれ、列の後ろについてみたのであるが、列て入り口には誰も並んでいないのが嬉しい。こちらとしては、塔見物に代わるべき施設を探していたのであるが、実は、その裏で、次回の「塔攻略」に向けて、ちよつとした布石を打っておこうと思ったのである。

地味な施設と言ったけれど、どう飾ったって監獄は監獄だから、開放的ではないし、だいたいイメージが良くないので、是非とも尋ねてみようという気にはならない。フランス革命の際には、かのマリー・アントワネットは、ここにしばらく監禁されたあと、断頭台に送られたとのことだから、彼女のファンなら話は別だろうが、ベルサイユに行ってしまうと敢えてここを訪れたいとは思わない。三年前、大聖堂を見物した後、ステンドグラスで有名な、隣のサント・シャペルには寄ったものの、ここは素通りだった。今回は、その、誰も行かないであろうところ、狙い目だったのである。

カフェで昼食をとって、出るときにトイレは済ませたので、心配するほどのことはなかったのだが、ヴェルサイユの一件（「琅」第三十号参照）以来、私たちはかなり過敏になっていた。これからホテルまで戻らなければならぬので、ここでもう一度体内の水分調整をしてお

は遅々として進まない。時折、思い出したように動くことはあるが、それは、どんな入場させているからではなく、あきらめた人が離れていくことによる前進というのが正しい認識だろう。三〇分ほど列の中にいたが、この様子では二、三時間待っても順番は来ないだろうと、昼も近かったので、すぐ目の前のカフェに入って様子を見ることにしたのである。

食事を終え、コーヒーが済んでも、列にはそれほど動きはないようだった。列を離れる前、私たちの近くにいた家族らしき一団は、列の半分までも来ていなかった。先にも記したように、ノートルダム寺院はそれほど混んでいるとは思っていなかったのである。他に行きたいところがないわけでもないで、この日は塔からの展望はあきらめて、他を回ることにした。登頂には戦略の立て直しが必要だった。

大聖堂から歩いて五分もかからない所、セーヌ川に架かる大きな橋のたもとに、コンシェルジュリーという、かつて監獄として使われていた建物がある。ここでもミュージアム・パスが通用する上に、地味な施設だけあって直しが必要だった。

いたほうがいいだろう。それに、ノートルダムには、改めて来なければならぬので、そのための下調べも必要である。なぜ、ノートルダムに行くのに、そこから歩いて五分ほどの施設での下見が必要なのか・・・ノートルダムには「それ」がないからである。

コンシェルジュリーの「それ」は、入ってすぐの大広間の先に、すぐに見つけることができた。私の、数少ない経験からではあるが、訪れる人が少ない割には、ここは数的には充実していると思われた。パリでの「それ」の設置は、施設利用者の数によつてではなく、「それ」に適した場所があるかどうかによつて決められているように思われる。数的な充実もさることながら、訪れる人が少ないので、使用頻度も少ないのだろう、清潔さが保たれているように見受けられた。この在処と使用状況を確認することが、重要な下調べだったのである。

年を取るに連れ、思い込みが強くなり、そのための間違いが多くなって、迷惑をかけることが増えたと、機会ある毎に、身近な人たちに伝えてきた。それはパリに来ても変わらない。

ノートルダムからの眺望を得るには、もっと早い時間から行動を開始しなければならぬ、これが私たちのたどり着いた戦略である。この考え方自体は間違えてはなかった。早い時間というのは、具体的には開門前ということになる。開門は九時・・・いつ、そうインプットされたのか覚えていないのだが、私の思い込み時計ではそうなっていた。前日、大聖堂を離れるとき、わざわざ、ゲートの表示板をカメラに収めたのだから、それを再生すれば、正確な開門時間は確認できるのであるが、思い込みは、カメラよりも強いのである。

地下鉄を乗り継いで、八時半過ぎには、ゲート前に到着した。前日、大デモ行進の一団かと思われるほど、歩道を埋め尽くしていた人の波がウソのように、教えてみると私たちは先頭から十一番目である。「早起きは三文の得」の諺は、ここフランでも通用すると見たのだが、しばらくしても、なかなか後ろに人が並ばないので、まさか、休館日ではあるまいと、入り口の看板を確かめると、休館日ではないが、開館は十時―十八時半とある。前日の薬が効きすぎたと言えはいいのか、「過ぎたるは及ばざるがごとし」と言えはいいのか、かなり無駄を含む

んだ動きだったことに違いはないが、先頭から十番目というのは、負け惜しみではなく、かなり感動的な順番だったと言える。

その感動については後で記すことにして、先に、もう一つの感動話を記しておこう。

夏とはいえ、早朝のパリは結構冷える（前日入ったカフェのお兄さんも、今年の低温は異常だと言っていた）。道ばたの縁石に腰を下ろしていると、すぐにお尻がひんやりとしてくる。下半身が冷えてくれば、当然、生理的な欲求が生じてくる。いよいよ、前日仕掛けておいた布石がものを言うときである。少し長くはじめた列に家内を残し、一人、コンシエルジュリーに向かったのである。

建物の前に誰も並んでいないので、こちらも開場前かとちよつと慌てたが、ただでさえ訪れる人の少ない上に、開館直後だったようだ。ここでも、例の第二の矢「ミュージアム・パス」が通用する。中に入れば、目指すところは前の日に確認済みである。敢えて見物客を装うようなことをしなくとも、誰にとがめ立てされることもなく、用を済ませることが出来た。

「ミュージアム・パス」のこうした利用法は私の創案によるものではない。パスを購入する際に見ていた、ネットかがイドブックで知ったのである。そのときは、特に気に留めてはいなかったのだが、アドバイス通りにやってみて、この利用方法は、もつともつと大々的に宣伝すべきと感じた次第である。

先に、先頭から十番目は感動的な順番だったと述べた。それは、以下のような理由による。

入ってみて分かったことだけれど、ノートルダム寺院の聖堂は一度に何百人、いや、何千人もの人が入れるくらい広いが、塔の部分はそれほど広いものではない。展望台は、ビルの十階ほどの高さまで、狭い石の螺旋階段を上って行った先にある細い通路のような所で、一度に入れる人数は限られている。しかも、一端入ってしまったら、時間制限があるわけではないので、心ゆくまでパリア俯瞰を楽しむことになる。前日、入場待ちの行列に並びながら、どうしてもつと、どんどんと入れないのだろうと思っていたのだが、入ってみると、その理由がよく分かる。厳密な一対一対応となっているわけではないだろうが、入った人が出て来ない限り、次の人は入れない仕

組みになっているのだ。

展望台を歩いてみると、ビクトル・ユゴーの小説「ノートルダム・ド・パリ」（私が子どもの頃、この小説が映画化され、日本で上映されたときの題名は、『ノートルダムのせむし男』だった）の一節が掲示されていたので、後でゆっくり読もうと写真に撮ったつもりだったが、なぜか完璧にボケていて、読めるものではなかった。

帰ってから、その文庫本があるかと思っ探したが、今は出ていないようなので、やや高めではあったが、ユゴー全集の一冊を注文して読んでみた。そのあとがきに、「ユゴーの最初の傑作小説」と出ていたが、十九世紀のロマン主義文学を「傑作」として味わうためには、いささかの準備が必要と感じた。

小説の初めの方に、「ノートル・ダム」「パリ鳥瞰」と題された節がある。ここは、小説の舞台を説明している重要どころで、ユゴー自身、「私はこれまで、パリのノートルダム大聖堂の昔の素晴らしい姿を、みなさんにお伝えしようと努めてきた」と記しているように、丹念に書き込んでいると思う。こちらにも、実際に塔への石段をこの足で踏みしめ、この目でパリ鳥瞰してきたこ

とでもあり、どのように描かれているか、楽しみに読み始めたのであるが、小説が書かれたのが、今からおよそ二百年前、物語は、さらにそれから三百五十年も前のことである。当時から変わらないのはセーヌの流れくらいで、エッフェル塔も凱旋門もサクレクール寺院も、影も形もない時代のことなのである。昨今流行の、「江戸古地図の旅」さながら、パリの古地図を片手にしながらでない、よく理解できないのが正直なところだ。

最上階まで登ってきて、まだそこに大きな鐘が残されていることに気づいた。「せむし男」の鐘番・カジモドが撞いていた鐘である。小説には、「・・・大ミサの日といえば、鐘楼からは鐘の音が響き、また結婚式や洗礼式の日には、小さな鈴を振って、ゆたかな音階を奏でて鳴りわたったものであった。そして空中には、ちよūd刺繍模様のように、妙なる音という音が縦横に入り交じるのであった(二六一頁)。」とある。

それにしても。身長百八十cmの私が立っけていてもすっぽり入ってしまうような大きさの鐘である。クレーンのない時代に、ここまでどうやって上げたのか、昔の人は偉かったと思う。

思いを寄せられる相手役をジョアンナ・シムカスが演じた映画で、ジャンルとしてはアクション映画の範疇に入るのだろうが、私にとっては、個人的な淡い思い出になる青春映画である。我が国での最初の上映は、一九六〇年代の終わり頃ではなかったか。海に浮かぶ要塞のような建物を空から俯瞰するラストシーンが印象的だった。それと、口笛をモチーフにした哀愁に満ちたテーマ音楽が何ともせつなく、今でも耳によみがえってくる。友人たちにそののかされたのが始まりだった。アラン・ドロン扮する曲芸飛行のパイロットが、凱旋門のアーチの下を軽飛行機でぐり抜けるというのである。私は、長いこと、飛行機がアーチをぐり抜けるのを見たと思いい込んでいた。しかし、よく考えてみれば、ぐり抜けるに成功したパイロットが大金をせしめたという展開ではなく、むしろ、次の儲け話に乗り出すことが、この映画のメインストーリーだったはずだから、「凱旋門はぐり抜けなかった」と考えるのが合理的なのだが、一度思いい込んでしまうとなかなか改められない。

初上映から三十年以上も経って、リバイバル公開があった。テーマ音楽を聞くだけで、甘酸っぱい気持ち

塔から下りて、念のために、上るときに入ったゲートの前まで行ってみた。朝、時間間違いをして、ひどい無駄をしてしまったかと思っていたのだが、改めて「三文の得」を実感し、溜飲を下げたのである。前日同様、世界各地のからの旅行者(この中には、売店の売り子に場所を尋ねた人も居るのだろうなあ)が、文句一つ言わず並んでいる。でも、遅く来たらそういうことになるのだ。一度に入れる人の数には制限があるし、入ってしまえば、申し訳ないけれど、門の前でどれほどの人が待っているかなど、これっぽっちも考えはしないから。だから、文句を言いたくなかったら、八時半には来て開場待ちをするしかないのだ。ここだけの話だが、「ミュージウム・パス」より「早起きパス」の方が断然有効なのだと言っておこう。

第三話 凱旋門

― または、記憶という創作行為 ―

「冒険者たち」という、古い映画をご存じだろうか。アラン・ドロンとリノ・ヴァンチェラが主演し、二人から

よみがえってくる。映画が始まって間もなく、凱旋門を模した空間を、飛行機がぐり抜ける練習シーンがあり、その段階ではぐり抜ける試みは成功していた。そして本番、飛行機は爆音もけたたましく、凱旋門に向かう。しかしながら、目標が目の前に迫ったとき、飛行機は急旋回し、空の彼方へ飛び去ってしまった・・・。

凱旋門とは全く関係ない話であるが、この映画に関して、私にはもう一つの記憶違いがあった。ヒロインのジョアンナ・シムカスが身につけていた白いビキニの水着が、目にも鮮やかだったと記憶していたのだが、私が白と思っていたのは、実際は青いビキニだった。水着姿は何度か出てきたように思うけど、白い水着は一着もなかった・・・と言う具合に、人の記憶は心許ない。いや、心許ないというより、記憶は、自分の都合の良いように、積極的に作り替えている創作行為なのではあるまいか。

日本を出る前に散髪に行ったときのことである。私がパリ行きを口にする、この半世紀近く、私の髪の毛を焼いてくれているI氏は、昔、同業の美容師仲間とフランスに行ったときのことを、懐かしそうに話し出した。実は、I氏からフランス旅行の話聞くのは、これが

初めてではない。前回のパリ行きに際しても、武勇伝とともに、二、三のお勧めポイントを紹介してもらった覚えがある。その中に、凱旋門も入っていたのだが、彼の話の中に一ヶ所腑に落ちないところがあり、こちらの聞き間違いだったかもしれないと思って、確かめてみよう和水を向けてみたのだが、彼の答えは変わらなかった。仲間たちとシャンゼリゼ大通りを歩いてきて、そのまま道路を突っ切って凱旋門に登ってきたというのである。こちらの聞き間違いではなかった。

前回、私たちは凱旋門に登ることはなかった。登らないどころか、そのアーチの下にも行けなかった。朝、空港で乗ったリムジンバスが着いたのが、広い道路を挟んで目の前に凱旋門を見るところだった。到着したばかりだし、荷物もあることなので、またすぐに来られるだろうと、タクシーでホテルに向かったのだった。そのとき、本当に、この交通量の激しい道路を、I氏は突っ切って行ったのだろうかとか疑問を抱いたのだが、その疑問を晴らさないまま、帰国することになってしまったのだった。少々、横道に逸れるが、昔、私がフランス語を習い始めた頃に使っていた教科書には、確か、凱旋門はエトワ

ール広場にあると出ていた。今、ガイドブックを開くと、そこは、シャルル・ドゴール広場となっている。調べてみると、一九七〇年に名称の変更があったとのことだ。私がフランス語を学び始めたのは、ちょうどその年の春のことだった。広場は、ドゴール元将軍・元大統領の生前の功績を称えての改称だろうが、その正確な日取りがいつなのかは分からない。はっきりしていることは、改称は、私が使っていた教科書の出版には間に合わなかったということである。

地図を見ても、実際に行ってみても、ここがエトワール広場と呼ばれていた理由がよく分かる。広場を起点に、大通りが四方八方に延びていて（正確には八方ではなく、十二方と言うべきだが）、その形が凱旋門を中心に、星《エトワール》のように見える。肝心なことは、ここは交通の要所であり、車の流れは途切れることはなく、ここを突っ切るといことは、凱旋門に命を捧げることの意味する。ガイドブックには、凱旋門へは、地下鉄の駅やシャンゼリゼー大通りから、地下道でつながっている」と説明が出ています。I氏だって、絶対に地下道を使ったはずである。彼のフランス旅行は、たかだか十数年前の

こと、優雅に馬車が走っていた時代ではないのだから。そこで、二度目のパリ旅行から帰って散髪に行った折り、再度、いや再々度、I氏の思い違いを質そうと試みたのだが、彼の答えは変わらなかった。一度書き換えた記憶を元へ戻すのは難しいことなのだ。

ああ、凱旋門を前にして、地面を這いつくばっている場合ではなかった。私たちは、そこに登らなければならぬのである。

地下鉄を降りて地上へ出たとき先ず感じたのは、著名な施設にも拘わらず随分と辺鄙な所にあるな、という印象だった。辺鄙はちよつと言い過ぎかもしれないが、街中のホテルから随分と時間がかかったこともあり、落ち着いていると言えは聞こえはいいが、どことなくうら寂しい印象を受けるのである。ルーブル美術館やオペラ座などに漂っている華やかさに欠けると言えば当たっているだろうか・・・。

凱旋門の足下でうごめいているのが人間だと気づくまでに、地下道から出て、ほんのわずかだが時間がかかった。そこに色とりどりの小さなものが動いていることに

は気づいていたのだが、門に較べてそれがあまりにも小さかったので、直ぐには人とは思えなかったのである。

我が国で大きな門と言えば、東大寺の南大門か、南禅寺の三門くらいしか思い浮かばないが、木造りと石作りの違いなのか、同じ機能を果たす建築物とは思えない。

もともと、「門」とは言いながら、ここの門は、教会やお城など、どこか特定の施設に入るための門ではないから、同じ機能という言い方が、そもそもおかしいのかもしれない。

昔、使っていた教科書はパリの観光案内を兼ねたような作りになっていて、そこには、この門は直訳すれば「勝利のアーチ」を意味すると出ていた。「門」と言わず敢えて「アーチ」と言っているのだから、これはナポレオンの戦勝を記念するためのモニュメントというのが第一の機能で、「門」はつけ足しに過ぎないのだろう。

その「門」に関して言えば、これは特定の施設に入るための門ではないと述べたが、そこに行ってみて、これは、パリに入るための門だったに違いないと思うのである。

そう考えれば、この門が、街の中心部からいささか離れた辺鄙な所にポツリと建っている理由も納得できるので

ある。

ここに来たのは、映画と現実をつなぐため、大げさに言えば、「冒険者たち」をこの目で確かめである。そして、あの軽飛行機だったら、ここは十分通り抜けられると確信したのだが、やはり、物語の進行上、ここは直前で急旋回しなければならなかった……。

朝、雨が降っていてホテルを出るのを見合わせていたために、いささか遅い到着となったが、ここは町外れの行きにくい場所ということになるのだろう、観光客はいることはないが、それほどの混みようではなかった。チケット売り場に、多少の列はできていたものの、ミュージアムパスが「スイスイ入場券」のように働いて、列を尻目に、螺旋階段に取りつくことができたのである。

ぐるぐるぐるぐる螺旋階段を上るのはノートルダムと同じである。作られた時代がそういう時代だから仕方がないのだが、どちらにも、エレベーターもエスカレーターも設置されていない。足が不自由だったり、階段を上ると動悸息切れが激しくなる人には、面白くない施設ということになる。螺旋階段で目を回しながら、この次にここに来たときには、自力で登れるのだろうかど心配に

はなるが、ここにエレベーターをつける訳にはいくまい。

凱旋門の本質とは関係ないことであるが、ここで意外な体験してきたので、ここに記しておこう。人の集まる有名観光地で、常に不便をしてきた例のことだが、ここ凱旋門には、信じられないような所に、つまり、展望台のすぐ下の階に、立派なそれがあるのだ。さすがに、そのものズバリを写真に収めることはしてこなかったが、壁にあった、青地を背景にした白ヌキでの男女の人型の表示のみ撮ってきた。わざわざ、こんな高みに作らなくても良さそうなものと思うのは、私だけだろうか。まあ、上から流れ落とすだけのことだから、特別な技術は必要としないだろうが、これを「門」の中に作るという発想が、私には分からない。「なぜそこに、それを作ったのか？」と問えば、この人は、きつと「そこに、それを作るスペースがあったから」と答えるに違いない。

補遺

― 空からのパリ 総集編 ―

とのなかったブランタンデパートに入ってみたのである。食事の前に恐縮だが（と言っても、昼食を取るの私は私だからかまわないか？）、このトイレについてちょっと説明しておこう。

場所はデパートの二階、高級時計店の奥である。結論から言うと、有料ではあるが、パリに入ったトイレの中で、最も生理的かつ視覚的欲求に叶ったのがここだった。そこは、トイレというより高級衛生用品の展示コーナーかトイレメーカーのショールームといった感じだった。フロントに、しっかりした格好のマドモアゼルがいて、一人一・五ユーロの料金を徴収しているが、決して高いとは思わない。何がしっかりした格好かというと、彼女が身につけていたのは、私服ではなく制服で、その色とトイレットペーパーが、紫色で統一されているのである（他の色のペーパーのときにはそれにコーディネートさせるのかは分からない）。しかも、そのペーパーには、エッフェル塔が印刷されているところも泣かせる。もつとも、「生理的・視覚的欲求に叶う」と述べたが、我が国では、「無料」でも、紫色とエッフェル塔はともかくとして、この程度の清潔さのものは特に珍しくはないこ

帰りの飛行機は夜八時過ぎの便なので、最終日丸一日、パリの街を楽しむことができる・・・とはいっても、一週間もいればさすがに飽きてくる。マドレーヌ寺院に行くことにしたのは、近場でまだ行ったことのない所というところもあったが、その直ぐ近くにある老舗のジャム屋（エデュアル本店）をのぞいてみたかったからだ。エデュアルは、伊勢丹にも入っているのですが、わざわざこの地で重い瓶入りジャムを買うこともないのだが、私の欲しい品が相次いで輸入されなくなってきたので、事の真相を見極めたいと思ったのである。しかしながら、マドレーヌ寺院は二の次などと、神様をないがしろにしたバチがあつたのだらう、「改装のため閉店中」の貼り紙が、私たちをやりわりと戒めていた。

そのまま、本店をやり過ごし、ウインドショッピングをしながら（途中で、羊羹の「とらや」の暖簾を見かけたのは、このときではなかったか）、ホテルの近くまで戻ってきて、デパートの屋上で昼食を取ることにしたのだった。

はじめからそこで食事ができると思っていた訳ではない。トイレを借りる目的で、それまであまり利用したこ

とは付け加えておこう。

気になることが一つあった。私たちが出た後すぐに、フロント嬢が中の確認に行ったように思うのだが、気のせいだったろうか。西洋式トイレの使い方を知らない無教養な東洋人が、乱暴な使い方をしたのではないかと疑われたような気がして、少しへこんだ。この人たちにも、トイレに関して、使い易さ、衛生的、美しさなどの概念があるのなら、どうしてそれをもっと日常的な場面に適用しないのか、不思議に思うのである。

寄り道が長くなった。デパートの入り口にあった案内板を見て、屋上に食事スペースがあることを知ったのだった。そこは、買い物客相手の軽食レストランといった感じのところ、サンドウィッチやサラダ、飲み物をプレートに載せて、会計を済ませば、好きなところに席を取ってかまわない仕組みになっている。天気も良いので、屋外の日陰にあるテーブルに着いた。

デパートは五―六階建てだが、高さ制限のあるパリでは、この高さでも市内を一望することができる。エッフェル塔は第一展望台から上が見えている。凱旋門はアーチの上部から上がわずかにのぞいている程度で、よく見

ないと見落としてしまう。ノートルダム寺院は、オペラ座の背後に隠れてしまつて見ることはできない。何度となくお世話になったサンラザール駅は、上からみるとこんな風に見えるんだと、再発見をしたような気分になる。昼食を取りながら、今回の旅の総集編のように、空中パリ観光を満喫したところで、潔く旅をおしまいにすべきところだが、そこが貧乏性のなせる技、最後にもう一軒！ということ、目の前に聳えているモンマルトルのサクレクール寺院まで足を伸ばすことにしたのである。

家内が、食べたものの片付けに席を外しているとき、買い物途中と思われる地元のご婦人が二人、隣に席を取ることになった。何と言ったのかは覚えていないが、東洋人が片言のフランス語で挨拶をしたのが意外だったのか、家内が戻ってきたのを見て、夫婦連れなら安全と踏んだのかわからないが、「フランス語、お上手ですねえ」と話しかけてきた。ここをチャンスとばかり、話を盛り上げられればいいのだが、そういった才覚には、日本にいたるときから、いやいや、若いときから欠けている。「パリにはいつまで?」「今日まで。」「飛行機は何時?」「二十時。」といった全く気の利かないやり取り

をしていることに気づくのだが、こういうときは、どういふ展開に持ち込むといいのか、いや別に、そのご婦人とどうこうなるうというのではないんだけど・・・。

サクレクール寺院も、パリの至る所から眺めることができる、いわばエッフェル塔に並ぶこの街のランドマークである。寺院は、モンマルトルの丘と呼ばれる丘陵地帯にあるので、別にそれ以上登らなくても、パリを一望できるのだが、展望台ときくと、胸が騒いでしまう。ノートルダム寺院で苦い経験をしたので、その二の舞は踏むまいと、つまり、売りに展覧台の入り口を尋ねるようなことはすまいと思つたのである。ノートルダムでの経験が生きていたとでもいえないのか、この辺と思つた辺りに、展望台への入り口はあった。

しかしながら、結論から言うと、サクレクール寺院の展望台には登らないで帰つて来た。モンマルトル自体が高いいところにあるからということもあった。あちこち登つて、やや食傷気味ということもあった。時間も気になつてきて、外からはそれほど混んでいるようには見えなかったが、入ったら上まで階段ぎつしりに人が並んでいた、ということ想像したせいもある。

帰つて来て知つただけ、この寺院は完成してまだ百年ほどしか経っていない、パリの建物としては新参モノとのことである。もともと、普仏戦争の犠牲者を慰めるための施設として着工されたが、難工事で工期が延び、完成した時には、第一次世界大戦の犠牲者を慰めることになつたとのことである(鹿島茂 二〇〇〇年)。

この次来たときには、この展望台を攻略することから旅を始めることにして、丘を下りてホテルに向かった。

引用・参考文献

ヴィクトル・ユゴー(辻昶、松下和則 訳) 「ノートルダム・ド・パリ」 二〇〇〇年 潮出版社

鹿島 茂 「パリ・世紀末パノラマ館」 二〇〇〇年 中公文庫